

ギルガメシュの後裔：古代オリエントと中国

森雅子(中央大学)

かつてオットー・メルヒェン・ヘルフェンが「中国におけるヘラクレス」というタイトルの論文を *Archiv Orientalni* 7, 1935, pp.29-34 に発表し、その中で『楚辞』『山海経』などの古文献に散在する羿、もしくは后羿とも夷羿とも称される英雄の数々の偉業がギリシア神話におけるヘラクレスのそれと極めて類似することを指摘したことがある。彼はこの二人の英雄の複数の項目における、そして細部にも及ぶ類似は決して偶然の産物ではなく、「羿とはギリシアからスキタイ人の仲介によって中国にもたらされたヘラクレス、すなわち Herakes in Chine に他ならない」と結論した。

しかし、私自身は彼のこのような見解には甚だ懐疑的であり、羿の生涯や業績はヘラクレスのそれよりもむしろ古代オリエントの英雄ギルガメシュのそれに酷似し、後者の『叙事詩』によって前者を解釈する方がより適切であると考えている。実際、羿に関する諸史料は極めて断片的であり、しかも相互に矛盾した内容を含んでいるが、それらはギルガメシュの生涯や業績と対応させることによって初めてその本来の意味を明らかにし、また一つの纏まりのある物語につながり合わせることが可能になるのである。

以下に試みるのは、幾つかの項目に分けてギルガメシュと羿の類似を指摘し、かつてシュメールの地に生まれ、その後バビロニアやアッシリア帝国の時代を通じて語り伝えられた『ギルガメシュ叙事詩』が中国に伝来して、恐らくその地で人々から崇拜されていた十日神話(十個の太陽が一斉に出現し、地上を苦しめていた時に、九個の太陽を射落として人々を灼熱地獄から開放した英雄の物語)の主人公として名高い羿と集合し、后羿叙事詩と呼ぶに相応しい物語を生んだことを指摘することである。古代オリエントの神話はこれまで信じられていたよりもはるかに古くから、そしてはるか遠方まで伝播・流布し続け、その西方に向かったものの一つの結実がヘラクレス(もしくはアキレウスやオデュッセウス)の物語であり、東に向かったものが羿(もしくは靈均)の物語であったことは殆ど疑う余地がないのである。